

長期実践レポート

— おしまコロニー ねお・はろう（北海道北斗市） —

社会福祉法人有愛会・おしまコロニー
障がい者支援施設 ねお・はろう
施設長 夏目 智志

1

事業所の概要



- ・前身は昭和53年開設、第二種自閉症児施設・第二おしま学園（定員40名）
- ・児童福祉法の改正に合わせて、2つの児童施設のうち、第二おしま学園が児者転換し、60名定員の成人施設になる。
- ・平成5年に厚生省の委託事業として強度行動障害特別処遇事業の実施施設。
- ・24年度の3月まで加算事業の対象施設として運営。
- ・ちなみに、ねお・はろうとは・・・

2

まず、事業所の概要からです。おしまコロニーがどこにあるかというと、北斗市の海岸沿いから、当別地区というのがありまして、そこから山のほうに上がっていくと、こういった写真の、ゆうあいの郷が広がっております。私の働いている「ねお・はろう」が写真にある場所です。

ねお・はろう、おしまコロニーといっても、なかなか聞き慣れないと思うのですが、昭和 53 年に開設した第二種自閉症児施設の、第二おしま学園というのが前身です。児童福祉法の改正があり、それにあわせて2つの児童施設のおしま学園と、第二おしま学園が、加齢化の課題を抱えていたので、成人の人を集めて、定員 60 名の「ねお・はろう」という成人施設として、平成 25 年から運営させていただいております。

もともと第二おしま学園は、平成 5 年の厚生労働省の委託事業として、強度行動障害特別処遇事業の実施施設として手をあげさせていただき、平成 24 年 3 月まで、加算事業の対象施設として運営させていただいておりました。ちなみに、「ねお・はろう」の「はろう」とい

うのは、Hello のハローではなくて、「根を張ろう」、大地に根を張るという意味の名前で、開設したときにつけていただきました。

事業所の概要については、年齢状況は、平均年齢が 30.3 歳です。児童施設からの移行だったので、比較的若年層が多いです。最高齢で 40 歳の方がいますが下は 18 歳、19 歳。高校を卒業して利用したという方もいらっしゃいます。

事業所の概要

- ・年齢状況
 - ・平均年齢: 30.3 歳
(男性 49 名: 平均 30.9 歳、女性 7 名: 平均 25.7 歳)
- ・障がい状況
 - ・最重度: 41 名 (73%)、重度: 14 名 (25%)、中度: 1 名 (2%)
- ・支援区分状況 (平均 5.6)
 - ・区分 5: 18 名 (32%)、区分 6: 38 名 (68%)
- ・重度支援加算対象
 - ・50 名 (89%)

3

障害の状況としては、最重度が 41 名で、重度が 25%、中度が 2 % という状態で、ほとんど重たい方が利用されています。支援区分も、平均 5.6 です。区分 5、区分 6 の方が中心となっています。重度支援加算の対象者も 50 名。89% が重度支援の対象となっています。

強度行動障害の得点に照らし合わせると、大体 39 名の方がその対象になるかな、というように思われます。

強度行動障害者支援の取り組み

- ・平成5年4月～強度行動障害特別処遇事業指定
 - ・特別処遇棟(わかさ寮)運用開始、定員4名(本体施設40名)
- ・平成10年4月～特別処遇加算事業へ改定
 - ・わかさ寮増築(定員10名うち加算対象4名)、本体施設30名
- ・平成18年4月～児童施設・措置から利用契約へ
 - ・有期限有目的利用・セブスター(独自事業)の廃止
- ・平成24年4月～第2種自閉症児施設種別廃止
- ・平成25年4月～児童福祉法改正、児者転換
 - ・わかさ寮、女性棟へ転用

4

強度行動障害支援の取り組みです。平成 5 年に特別処遇事業の指定を受けています。特別処遇棟として、わかさ寮という 4 名定員の建物を建築しております。本体施設が 40 名でしたので、あわせて 44 名の定員でしたが、平成 10 年に特別処遇加算事業に改定されたので、わかさ寮を増築し、完全個室で 10 名の建物にしました。加算の対象は 4 名だったのですが、10 名の方が生活する建物に変わっています。

平成 18 年 4 月から、児童施設のほうが措置から利用契約へ変更されています。このとき、有期限、有目的でセミステイという、3 か月の独自事業の取り組みをやっていたのですが、こちらのほうは廃止されています。

平成 24 年 4 月に、第二種自閉症児施設という種別がなくなりました。そのあと平成 25 年に児者転換して、「ねお・はろう」という形になっております。この時、成人施設に変わりましたので、特別処遇棟だったわかさ寮は、今は女性用の建物として活用されています。

強度行動障害者支援の取り組み

- これまでの対象: 31 名(男性: 26 名、女性 5 名)
- 開始時年齢

6~8歳	5名	16.1%
9~12歳	6名	19.4%
13~15歳	14名	45.2%
16~18歳	6名	19.4%
- 出身地(所管児童相談所)

函館	13名	41.9%
中央	6名	19.4%
釧路	3名	9.7%
旭川	2名	6.5%
岩見沢	2名	6.5%
札幌	2名	6.5%
道外	3名	9.7%
- 知的程度

最重度	16名	51.6%
重度	11名	35.5%
中度	3名	9.7%
軽度	1名	3.2%
- 副診断

自閉症	31名	100.0%
てんかん	14名	45.2%

強度行動障害者支援の取り組みについてですが、これまでの対象者は 31 名です。男性が 26 名で、女性が 5 名。開始年齢は、若年では 6 ~ 8 歳という方もいましたし、思春期と言われる中学生時期がやはり多かったかなと思います。知的程度は、最重度の方が多く、重度の方がその次、といった形になっています。第二種自閉症児施設でしたので、対象は皆さん自閉症の診断を受けています。

出身地は、ほとんど道南圏ですが、道央という札幌近

郊の方もいました。地理的には分かりにくいかもしれませんが、釧路や旭川など、道内の広い範囲で、利用されている方がいらっしゃいました。北海道はやはり広いのです。新潟と東北六県をあわせたぐらいの広さがあります。広域分散。あとは積雪があるので、地域を全部バックアップするというのがとても大変だったというのが当時の思いとしてあります。渡島支庁と檜山支庁というのが、道南圏にあたるのですが、その広さでも群馬県と大体同じぐらいの広さなので、道南圏であっても道南を端から端まで支援するというのは、とても困難性が高かったというのが当時の状況でした。

利用する人たちと家族の現状を見たとき、悲惨な状態がやはりあるので、タイムリーに支援をしていかなければならないということがありましたが、定員枠が 4 名だったという制約と、広さの制約があり、全道をカバーするというのは、とても困難でした。

強度行動障害者支援の取り組み

- 開始時得点(平均26.2)

20~25点	18名	58.1%
26~30点	6名	19.4%
31点~	7名	22.6%
- 終了時得点(平均14.4)

1~10点	9名	29.0%
11~20点	15名	48.4%
21~29点	6名	19.4%

対象者の現在:

- 継続入所 10 32.3% (第二おしま学園~ねお・はろう)
- 家庭引取り 4 12.9%
- 成人施設移行 11 35.5%
- グループホーム 1 3.2%
- 他の児童施設 5 16.1%

得点の推移については、このようになっています。児童ということもあって、比較的 3 年間で行動障害の得点は減少していると思います。

終了後の進路について。終了時の行動障害得点と進路との関連性は、あまりなかったと思います。行動障害が改善された人が移行しやすかったというような形ではなく、やはり地元のほうの成人施設の空き状況が一番大きかったかと思います。こういう取り組みをしても家庭での立て直しは難しく、やはり家庭に戻るというよりは成人施設にそのまま移行するというケースが多かったです。

成人施設の状況によって進路が変わっていったのではないかと考えています。

それでは、次に、事例を紹介させていただきます。

事例紹介

1. プロフィール概略

- ・氏名:M
- ・性別:男性
- ・年齢:27歳(平成28年4月1日時点)
- ・体格:165cm 52.0kg
- ・障がい名:知的障がい重度 自閉症
- ・障害支援区分:区分6
- ・IQ:21(平成21年5月27日)

今回出す事例は、27歳の男性、重度の知的障害がある自閉症の方のケースです。平成11年度の厚生科学研究の通称飯田班、弘済学園さんのケースカンファレンスに出させてもらったケースです。小学校5年生のときに書かせてもらって、今はもう27歳です。その方の長期レポートということで、紹介させていただきます。

事例紹介

2. 障がいの経過

- ・4才頃より自分の意思が伝わらないと顔や手を引っかいたりするなどの自傷行為があった。
- ・学校入学時、多動が強くなり、頻尿や嘔吐を手に塗りつけて感覚遊びを楽しむ、大人に抱っこを求め、自分の思うようにならないと友達を叩いたり、引っ掻いたりする。
- ・母親を対象に壁を蹴る、物を投げるなどの破壊や引っかく、叩く。
- ・主治医(精神科)からは、問題行動に対して受け止めるようにとの助言。学校と家庭での対応を統一するために、教師がマンツーマンで付き、本人の要求のままに、廊下を延々と往復する。
- ・平成9年11月の手術入院をきっかけにうつ病的症状。一日中トイレにこもる、泣き出す、パニックを起こす。

障害の経過としては、4歳頃から自分の意思が伝わらないと顔や手を引っ掻いたりする自傷行為がありました。学校入学時、多動傾向があり、頻尿や唾液等を手につけて感覚遊びを楽しむ、大人に抱っこを求めてずっと抱っこをされ続ける。自分の思うようにならないと、友達を叩いたり引っ掻いたりする、ということがありました。

母親を対象に、壁を蹴る、ものを投げるなどの破壊や、引っ掻く、叩くという行動が頻繁に出ていました。

精神科の主治医からは、「問題行動に対して受け止めるように」というような助言を受けて、学校と家庭での対応を統一するために、本人の行動のほとんどを受け入れるようにして、教員がマンツーマンで付き添い、本人の要求のままに廊下を延々と往復するというような学校生活を送っていました。

平成9年11月に手術のため入院。アデノイド、のどの扁桃腺を取る手術でした。体を抑えつけられて点滴をすることがあり、そのときから少し鬱状態のような症状が出て、1日中トイレに引きこもる、泣き出す、パニックを起こすというような行動があったようです。あとは壁面に額を打ちつける、昼夜逆転など、生活のリズムもかなり乱れがありました。行動障害の改善を目的として、平成10年12月に第二おしま学園に入所しました。

事例紹介

2. 障がいの経過

- ・床や壁面に額を打ちつける、昼夜逆転の睡眠の乱れがあり、行動障害の改善を目的に平成10年12月に第二おしま学園入所。
- ・本人の特性から、時間の管理、身辺技能、コミュニケーションなど、個別支援を通じて行動は徐々に安定。
- ・1年経過して改善が図られたため、保護者の強い希望で退所するが、再び行動上の問題が表出。道央に所在する児童施設の入所を経て、平成12年11月に第二おしま学園に再度入所。
- ・前回同様に線画レベルのパートデイスケジュールを提示。自立課題や余暇活動、家事活動などを提供した。
- ・身辺スキル、コミュニケーションスキルの向上と通じてほぼ平穩に過ごしている。

入所時の状況と取り組みについてです。入所直後から玄関のコンクリートにガンガンガン頭を打ちつけるような状態で、小学校5年生ですが大人が2人がかりで体を抱えなければならない。離れるとすぐに床などに行くので、入所してから2週間ぐらいは、本人が夜寝るまで、大人2人が付き添うというような生活をしていました。その当時の強度行動障害得点については、児童相談所の判定では30点台だったのですが、実際に関わってみると、もう40点を超えるような状況だったのではないかなと思います。

本人の特性に応じて、時間の管理、身辺技能、コミュニケーションなどの個別支援を通じて、行動が徐々に安定していきました。1年を経過してかなり劇的に改善が図られ、保護者の強い希望で退所しました。

家庭でも視覚的な支援を継続し、学校とも連携を図りながら生活を再開したのですが、ご本人から発せられるいろいろな要求をご家庭ではすべて受け入れてしまうという生活になっていました。たとえばお父さんと外出して、プラレールを1回買うと、次の外出の時にも必ずプラレールを要求して買う。毎回行くたびに買う。部屋の中がいっぱいになって、プラレールがもう置けなくなってしまうので、「もう行けません。」と言う。するとそこでパニックになって、行動障害が再発するというような状況になっていたようです。そうなると、活動が停滞したり、拒否したり、自傷・他害といった行動が表出し始め、家庭生活が困難になってしまいました。そこで、道央の障害児施設に空きがあり利用したのですが、そこでも絶えず額で窓ガラスを割るという行動があり、やはり大人が付きっきりで生活していなければならなかったそうです。そこでの生活も困難だということになり、平成12年、再度第二おしま学園を利用することになりました。

再入所後は前回同様に、線画レベルのパートディスクジュールを提示したり、自立課題、余暇支援、家事活動を提供しながら、身辺スキル、コミュニケーションスキルの向上を通じて、ほぼ平穏に過ごしていました。

平成14年度は業務体制の変更があり、6名中半数の担当職員が変更になり、そのうちの2名が新任職員というような状態でした。夏頃から、活動への拒否などが頻繁に見られるようになりました。ただ、車での外出などには応じて、外出する日は満足して拒否や停滞などがなくなるので、平日であってもドライブに誘うような状況になっていきました。「ドライブ」や「たこ焼き」など、本人が外出を求めるかのような言葉に対してどんどん受け入れていくと、今度は、周期的に行われる「爪切り」や「耳かき」などの表出（要求）も徐々に増えていって、外出した翌日にまた外出を要求するし、耳かきや爪切りをした数分後にまた「耳かきしたい。」と要求するような状況になっていきました。

そこから9月頃になると、活動への拒否と同時に、職員をつねる、叩く、引っ掻く、噛みつくといった行動が表出してきました。そういった行動をおさえると、建具の角に額をぶつけるなどの自傷も表出しました。職員の姿が見えた瞬間に向かっていくという状態だったので、職員にとっては脈絡なく出てくる行動に対し、職員は「強迫的だ」という表現をするような状態でした。

10月に入ると、行動はさらにエスカレートしていき、1日に何度も他害に及んで、制止されると壁や窓ガラスなどに頭突きをするというような行為が1日中頻回に発生していました。

事例紹介

3. 障がいの再表出と個別支援

① 行動障がいの再表出

- 平成14年度、寮体制に変化。夏ごろより、活動への拒否が頻繁。車での外出には応じ、満足した表情や拒否などの行動が数日見られなくなることから、時間があると外出へ。
- 「ドライブ」「たこ焼き」という言葉と周期的に行われる「みみかき」「つめきり」という言葉の表出も増加し、外出した翌日や耳かきをした数分後に要求。
- 9月になると、活動への拒否とともに、職員をつねる、叩きかかる、噛みつく等の他害や、建具の角に額をぶつける等の自傷が表出。
- 人の姿が視界に入ると即座に表出し、脈絡なく職員を追い回して他害。
- 10月に入るとさらにエスカレートし、一日に何度も他害に及び、制止されると壁やガラスに頭突きしたり、周囲にあるものを投げ投げたりする行動が一日に頻回に発生する。

事例紹介

3. 障がいの再表出と個別支援

① 行動障がいの再表出

a. 行動障がいの様式と主状況

行動名	案件	行動
拒否	・ 活動のキューカードを渡されて	・ 「いや」と言って受け取らない、顔を伏せてうすくまる。
破壊	・ 活動を声掛け等で促されて	・ テーブルから払い落とす、投げ捨てる
他害	・ 血や食事トレイを置かれて	・ ガラスに頭突きをする
自傷	・ 活動を促され	・ ひっかく、叩く、噛みつく
	・ 誘導される途中で	・ 壁やガラスに頭を打ち付ける
	・ 職員が部屋に入ってくると	・ 建具の角に額を打ち付ける
	・ 他害を制止されると	

そのときの行動障害の状況は、表に示した通りです。活動のキューカードを渡されたり、活動の声かけをされ

ただこういった生活も、平成14年に突然乱れました。

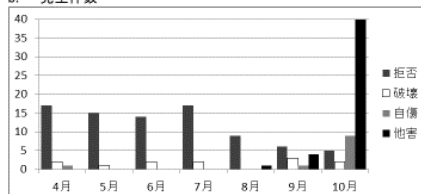
でも、「嫌」と言って受け取らなかったり、顔を伏せてうずくまる。食事や皿、トレイをテーブルから払い落とす。あとは、食べている他人のところに行って、それを取り上げて叩きつけるなど、そういった行動が破壊行動としてありました。他害としては、誘導される途中で引っ掻く、叩く、噛みつくというように、支援をしようすると攻撃されるといった状態でした。そういった行動を制止すると、ガラスに頭をぶつけるというような状況につながっていました。

事例紹介

3. 障がいの再表出と個別支援

① 行動障がいの再表出

b. 発生件数



これが、そのときの行動の件数をグラフにしたものです。10月に急激に他害行動が増えています。本人の表す他害は、関わる場面だけでなく、急に部屋から出てきて職員を探して及ぶということがあったので、不安定な時には、緊急的な行動制御として施錠せざるを得ない状況でした。向精神薬の増量や病院への入院も検討されましたが、改善の糸口が見つけられず、職員会議や利用者会議で話し合われても、なかなかまとまらない状態でした。当時配置されていたケースマネジメント担当と相談・協議をおこない、再度、本人の特性を整理し、それまでの行動観察記録や観察場面から、行動・特性を明らかにするという作業をおこないました。

事例紹介

3. 障がいの再表出と個別支援

② 行動特性の理解

a. 行動特性の整理

■ コミュニケーション・社会性の特性

- ・ 体調不良などのネガティブな確認は否定する。
- ・ 指示への反応は、周囲の動きやルーティンに依る。
- ・ 語尾が上がるイントネーション。
- ・ 「○○は」「○○ドコカナ」という表現を用いる。
- ・ 一度行った表現や提示されたCOMカードは必ず使おうとする。
- ・ ヘルプ要求は視線を合わせられて初めて表出。
- ・ 手助けが習慣化しやすく、「先生が」と要求する。
- ・ 場面にそぐわない笑いや笑顔などの表情。
- ・ 声を掛けられて動くことが習慣化しやすい。

そこから明らかになった行動特性は、コミュニケーション、社会性の特性として、受容面では体調不良など、ネガティブな確認は必ず否定する。指示への反応は、周囲の動きや雰囲気によるところが大きい。表出面では、語尾が上がるイントネーションで、「何々かな?」「どこかな?」「何々は?」などというような言葉の表出がある。要求であってなくても語尾が上がるので、要求のように聞き取られてしまうという点がありました。あと、一度おこなった表現や提示されたコミュニケーションカードは必ず使おうとするというような面もありました。社会性や対人関係では、手助けがやはり習慣化しやすく、一度手助けを受けると「先生が」というふうに要求をしていました。

事例紹介

3. 障がいの再表出と個別支援

② 行動特性の理解

a. 行動特性の整理

■ 全体よりも細部に注目する特性

- ・ カレンダーやデジタル時計の数字へ注意が向く。
- ・ 移行中に声掛け等の介入があると突然に動けなくなる反応がある。
- ・ 行動の開始は他人の動きに影響される。
- ・ 食事は一品食いで順番が決まっている。
- ・ 待機する場所など、自分の位置がいつも同じ。
- ・ 変わらない手続きをこなすことが得意。
- ・ 日課からの逸脱は他者でも修正しようとする。
- ・ 習慣化した行動であっても指示や指図によってやり方が変化する。
- ・ 選択場面では直前や以前の経験に影響される。

細部に注目する特性としては、転動性・衝動性の部分では、移動中に突然声かけなどの介入をされると動けなくなる。行動の開始は他人の動きによるところが大きい。時間の整理・統合の特性では、時刻への関心が

あるが、時間の長さが分からない。食事が一品食いで順番が決まっている、などもありました。空間の整理・統合では、本やミニカーをいつも同じ順番に並べて置く。変化への対応では、変わらない手続きをこなすことが得意で、行動の判断はやはりルーティンに左右される。日課から逸脱するのは、他者であっても修正しようとする、というようなところがありました。

関係理解の困難さとしては、自発的に行動できることでも、一度指示や促しがあると、次の場面でも指示を待つ。他人が爪切りをしていると、自分の順番でなくても、その場所に行って待ってしまう。満腹でも食事は食べきらなければやめられず、嘔吐して、止めるといった状態もありました。

事例紹介

3. 障がいの再表出と個別支援

② 行動特性の理解

a. 行動特性の整理

- 記憶の特性
 - ・ 外出先で行ったことは、次の外出でも同じように実行しようとする。
 - ・ 前日に指示されて長靴を履くと翌日も長靴を履く。
 - ・ 一度行った手順は、次に変更があるまで変わらずにやり続ける。
- 感覚の特性
 - ・ 料理は一品ずつ、丼物は具材ごとに食べる。
 - ・ 他者が爪切りをしていると自身も傍に立つ。
- 微細運動・粗大運動
 - ・ ハサミを使って、線に沿って切ることができる。
 - ・ 塗り絵など枠からはみ出さないように塗りつぶす。
 - ・ 1cm四方の升目に文字が書ける。

15

般化の部分では、先ほどからの繰り返しになりますが、手助けなどがやはり習慣化しやすいということや、言葉のやり取りはパターンに依存して決まったやり取りしか成立しないといった状況が、特徴として整理されました。記憶の部分では、外出先で行ったことは、次の外出でも同じように実行しようとする。前日に指定されて、長靴を履くと、次の日も必ず長靴を履く。そういった記憶の特性の他、感覚の面でも料理の一品食いなどもあると思います。

微細運動・粗大運動では、ハサミを使って線に沿って切ることができたり、1cm四方のマス目に文字が書けることができます。

事例紹介

3. 障がいの再表出と個別支援

② 行動特性の理解

a. 行動特性の整理

- その他の特性
 - ・ 体調不良を問われると必死に否定する。
 - ・ 「注射する」と問われると拒否するが、予防接種などでは自ら腕を示す。
 - ・ 睡眠時間により、日課の進捗に比較的大きな影響がある。
 - ・ それらしい利用もないのに笑顔で座っている。
 - ・ 不明な感情表現。笑いがうれしいとは限らない。
- 理解に関する特性
 - ・ 「まって」という説明に対して、椅子などを示されると座っている。
 - ・ 活動中でも具体物を手渡されると別の活動に移行する。
 - ・ 他者の動きをキューにして動くことがある。
 - ・ 判断や選択は状況に応じるよりも経験や習慣に依るところが大きい。

16

その他の特性として、「注射するかい？」と言われると激しく拒否するのですが、予防接種は普通に腕を出してできます。それらしい理由もないのに笑顔で座っている、活動途中で具体物を手渡されると別の活動に移行してしまうなど、いろいろな理解に対する特性がありました。あと大きいところでは、判断・選択は、状況によるということよりも、経験や習慣に頼るところが大きいこと、がありました。

こういった特性を整理して、本人の個別支援計画を作成し、実施していきましょう、ということになりました。ここで、やはり「冰山モデル」で考え、本人から起こってくるさまざまな行動を、水面下にあるいろいろな背景で理解して支援を組み立てていくことになりました。

事例紹介

3. 障がいの再表出と個別支援

③ 行動の背景となる特性と支援方針

a. 自閉症の特性

- 職員をひっかく・叩く・噛みつくなどの他、壁や床に顔を打ち付けるなどの自傷。
- ・ 見通しが持てないことに不安が強い。
 - ・ 声掛けや促し、手助けなどのやり取りがパターン化しやすい。
 - ・ お代わりやほしいものを明確に表現できない。表現することが習慣化されていない。
 - ・ 要求の様な表現とイントネーションで言葉を表出。
 - ・ 変わらない手続きがある活動が好き。

17

自閉症の特性としては、見通しが持てないことに不安が強かったり、声かけや促し・手助けがパターン化しやすかったり、要求のような表現とイントネーションで言葉を表出したり、変わらない手続きがある活動が好きだった

りといったことが、自閉症の特性に由来する部分かと思っています。

事例紹介

3. 障がいの再表出と個別支援

③ 行動の背景となる特性と支援方針

b. 環境や状況

職員をひっかく、叩く、噛みつくなどの被害や職員に顔を打ち付けるなどの自傷。

- 外出など予定がほぼ無計画に提供される。
- 拒否への対応が職員によってまちまちである。
- 表出される表現が要求として受けとられやすい。
- 活動への導きや声掛けがメイン。
- 結果的に行動が表出しないように本人の要求をかなえてきた。
- どうなれば叶うのかということを学んでいない。

環境や状況について。環境要因としては、外出など、予定がほぼ無計画に提供されるというような生活がありました。また停滞や拒否への対応が、職員によってまちまちであったということもあります。表出される表現を、要求として受け止めてしまったということもありますし、活動への声かけがメインであったということもありました。結果的に、行動が表出しないように、本人の要求のあるなしに関わらず、いろいろなものを叶えてきたということで、逆にどうなったら叶うのかということを、全く教えてこなかったということがありました。そういった背景を踏まえて個別支援をやっていこうということになり、行動の背景となる、特性から見た支援方針として、以下のような方針を決めました。

事例紹介

3. 障がいの再表出と個別支援

③ 行動の背景となる特性と支援方針

c. 支援方針

- スケジュールによる日課の提示を徹底する。
- 人によって対応が違わないように、視覚的な指示を一貫して示す。
- 一人でやれる活動を増やし、所在のない時間を少なくするために活動を忙しくしつつ、リラックスできる場面も提供し、生活リズムを整える。
- 外出などの予定の計画的な提示のため、カレンダーや週間スケジュールの利用。
- 文脈に沿った明確に意味のあるコミュニケーションに対応するため、コミュニケーションカードを活用する。
- 個室への部屋移動など環境整備と向精神薬の服薬調整。

スケジュールや日課の提示を徹底すること。人によって対応が違わぬように、視覚的な指示を一貫して示すということ。1人でやれる活動を増やし、所在のない時間を少なくするため、活動を少し忙しくしつつ、リラックスできるような場面も提供していくということ。外出や、そういった予定の計画的な提示のために、カレンダーや週間スケジュールなど、そういったものを利用しました。

また、文脈に沿った、明確な、意味のあるコミュニケーションに対応するために、コミュニケーションカードを活用していきましょうという目標を立てました。あとは個室への移動などの環境整備や、向精神薬の服薬の調整も同時に行っています。

事例紹介

3. 障がいの再表出と個別支援

④ 取り組み

- ひらがな文字と絵のスケジュールを継承し、パートデイからフルデイ（一日分）提示。適宜スケジュールの確認へ導き、注意を向けてもらうようにした。
- タンス内の種類や入浴道具の準備の順番を文字カードで示しておく。
- 所定の場所や手続きについて文字で示す。
- 行事や外出予定などはカレンダー記入しておく。
- カレンダーを注目するように導き、言葉で期待させるような必要なかかわりをなくする。
- 要求するものは写真カードにて提示。
- 食事のお代わりでは可能なものを提示しておくようにする。
- 居室内にパーティションを施工し、個室を提供。
- 行動障がいの様式一覧を主治医に提示し、向精神薬の調整を依頼。

スケジュールの徹底では、それまで使っていた平仮名文字のスケジュールを継承しながら、パートデイから、フルデイ（1日分）のスケジュールを提示しています。本人の要求のような言葉があってもスケジュールに導いて、「そこに注意を向けてください。」というふうに促しました。一貫的な視覚的な指示としては、前後の理解が十分でなかったため、下着の全部に「前」という文字を書いておいたり、タンス内の仕分けの種類をタンスに提示しておいたり、入浴道具の準備の順番を文字カードで示しておくなど、所定の場所や手続きについては文字で示す、ということをして、できるだけ視覚的な指示を用いて理解できるようにしました。また、本人が忘れたり、間違ったりする場合は、そういった指示を指さして注意を向けてもらうという支援をしていきました。

カレンダーの利用では、時間や日数の経過が分からないのですが、カレンダーの何月何日ということに注意を向けるということではできたので、外出や行事予定などカレンダーに記入しておくようにしました。本人からの要求や確認があると、カレンダーを指さして「カレンダーに注目しよう。」という導き方をしました。言葉で「今度行こうね」などの期待させるような、不必要な関わりはしないようにも徹底しました。

コミュニケーションカードの使用では、言葉があっても、機能として要求か情報請求か分かりにくい面があり、対応する人によって受け取り方が違うことになってしまことから、要求するものは全部写真カードで提示しました。食事場面では、おかわりができるメニューと、そうでないものは、その都度、写真で提示しておくようにすることで、要求できるものとできないものを明確に示しました。

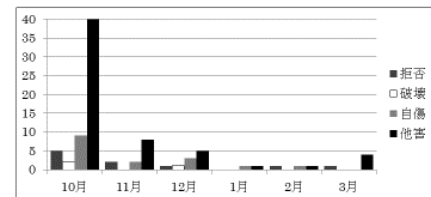
環境整備と服薬調整では、他の利用者への他害を防ぐだけでなく、同室の他の人の動きに影響されて、やはり自分の日課を逸脱してしまう。あとは他人の日課を気にしすぎ、自分のスケジュールに注意を向けられなくなるといったことがあったので、そういった意味で、室内にパーテーションを立て、個室を提供するようにしました。

本人の行動障害の様式一覧を資料に載せていますが、そういったものを全部主治医に提示して、向精神薬の調整を依頼しています。衝動性に効果があるリスパダールの処方を受けたのですが、行動に変化がないので、セレンেসに変更して、そのあと経過観察というような調整をしています。

事例紹介

3. 障がいの再表出と個別支援

⑤ 結果



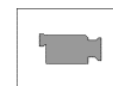
21

結果としてどうなったかという、10月の他害行動がどんどん減っていきました。対応する職員への他害は、12月までは見られましたが、それ以降は徐々に減少していきました。特に外出などの期待が強いと思われる予定がカレンダーで示されたことで、「何々は？」といった要求の言葉は減少して、「いつ？」と逆にこっちから問うと、「何月何日」というように答えられるようになりました。あとは、爪切りや耳かきなど、本人にとって予期せずに行われていた活動についても、日にちが指定されるということで、それについての確認というか、不安が少なくなったと思います。

コミュニケーション面では、おかわりのしたいものを明確に表現できるということだけでなく、その都度「おかわりできるよ。」「できないよ。」と説明して、本人が混乱していた曖昧なやり取り部分を「これとこれはできます。」と明確に枠組みを示すことで、おかわりしたいものがなければ下膳する、といった行動につながっていきました。

事例紹介

4. 現在の状況



動画

22

それでは、今の日中活動の様子を少し見ていただきます。7分ぐらいのビデオです。本当は行動障害が大変だった当時のビデオと一緒に出せればよかったのですが、見つからなかったのが、今の様子を撮らせていただきました。

日中活動で働いている様子です。今、フードをかぶってきたのが、紹介していた彼です。前々日ぐらいに雨が降っていて、「フードをかぶって行きましょう。」と言われたので、それからこの日もフードをかぶっています。「外しましょう。」と言われると外せるのですけれども、言わないとフードをかぶりっ放しです。

本人の活動場所には、こういったスケジュールというか、活動すべき内容が書いてある指示書のようなものが提示されています。本人の活動は全部文字で示されています。数に興味・関心があるので、何個用意するか、2個、3個などあると、自分で材料の入っている箱から材料を用意して、活動ことができます。終わったら裏返して、次の活動にいきます。規則性なく、いろいろなものが貼られていますが、本人はこれをとても大事にしています。今も注意を向けてから、何個出すのかが分かったら、その数を材料の棚から持ってきて準備をします。

簡単な牛乳パックのラミネートをはがす作業ですが、この数だけ材料を準備して終わったら自分で片づける、という活動を一人で行っています。紙の片づけや、置く位置もすべて視覚的に書かれています。

これが、本人のこの日のお仕事です。スケジュールは寮のほうにあるので、寮に帰るという手順もあります。

これは函館ならではの、身欠きニシンの箱をつくっているグループがあります。底板を釘で打つのですが、その釘に油がついています。それがついていると、箱を出荷するのによろしくないということで、その油を取るという仕事を本人はやっています。1本ずつ磨くので、かなり根気のいる仕事ですが、何回磨く、どのくらい磨く、などが分からないので、タイマーを押して、10秒磨く。タイマーが0になったらやめる、としています。

ちなみに、こういった数字のカウントも好きです。電卓も好きで、イコールを押すと、どんどん数字が増えていく足

し算。それをやって過ごしていたりするので、すごく数字には興味・関心・注意が向きます。

次は、線に沿ってパルプを切るというお仕事です。自分でジグを使って線を引いて、切る大きさを自分で記入し、自分で切って処理する。本当に職員が個々の空間では不必要に介入しないで、1人で仕事を完結させることができます。

これは、休憩に入ったところです。休憩の終わる時間が、ここに示されています。こういった時間というのも、本人には注意が向くので、こうやって確認して、終わったら次に移行していきます。

あれだけの量の仕事を1日でやって、これで最後のところかな。まだですね。これは掃除ですね。廃棄した服を細かく裁断したものを自分でまいて、そこをお掃除して片づけるという。これで本人の1日の仕事が完了するという流れです。動画は以上です。

まとめ

■本人の行動や支援を通じて理解できたこと

- ・ 本人の特性や興味・関心に応じた支援が行われなければ、行動障がいはいは表出しやすい。
- ・ チームで一貫した対応がなされなければ、行動障がいはいは表出しやすい。
- ・ 表現が未熟であればあるほど、行動障がいはいを表出しやすい。
- ・ 不必要な介入が増えれば増えるほど、行動障がいはいを表出しやすい。
- ・ 本人の特性や興味関心に応じた支援を提供し、身辺面やコミュニケーションのスキルをたかめ、より本人のスタイルに合った自立的な生活を提供することができれば、行動障がいはいは予防できる。

23

まとめです。本人の行動特性を整理したことで、自閉症に由来するさまざまな行動特性が確認されたのですが、自傷や他害などの行動障害は、特性としては確認されませんでした。また、暑さや寒さ、周囲の騒がしさといった環境刺激で行動が表出することもありませんでした。空腹やけがなど、体調が作用して行動障害が表出するようなことも、確認されていません。

したがって、本人の支援を通じて理解できたこととしては、本人の行動特性や興味関心に応じた支援が行われなければ行動障害は表出しやすいということと、チーム

で一貫して対応しなければ行動障害が表出しやすいということでした。

あとは、表現がやはり未熟であればあるほど、行動障害が表出しやすいというふうにいえますし、不必要な介入が増えれば増えるほど、やはり行動障害が表出しやすいのではないかと思います。

つまり、本人の特性や興味関心といったものを活かして、身辺面やコミュニケーションのスキル等を高め、より本人のスタイルに合った、自立的な生活を提供することができれば、行動障害は予防できるのではないかと考えております。これがまとめになります。

第二種自閉症児施設だった第二おしま学園から、支援の根拠としての記録とアセスメントというものは、自分の施設ではありますが、当施設の生命線として大切にしてきたつもりです。

根拠のある一貫したアプローチ、チームアプローチを、今後大切にしていきたい。これも1つの価値観だというふうに考えています。

おわりに

人とのかわりを通して学習してしまった不適切な行動に対して、かわりで修復しようとしても、それはなかなかうまくいかないことを経験的に知っています。

他人と安心してかわることができるように、あるいは他人とのかわりが楽しいと思えるようになるために、できるだけ自分の力が発揮でき、本人自身が必要とする場面に手助けを求められること。そうした支援を通して強い行動障がいのある人たちに携わってきました。

今回のケースでは、継続的に記録をとってきたこと、記録を整理分析してその行動の持つ機能と起こる背景として、本人の行動特性や環境・状況を明らかにしたこと、特性に応じて個別支援を実施したことが一定の成果を上げることができた要因であると考えています。

第二種自閉症児施設であった第二おしま学園時代から、支援の根拠としての記録とアセスメントは、当施設の支援の生命線として大切にしてきたつもりです。

根拠ある一貫したチームアプローチは、今後も大切にしていきたいねお・はろうの一つの価値観です。

24

おわりに1つだけ、お話しさせていただきたいと思います。

人との関わりを通して学習してしまった不適切な行動に対して、関わりで修復しようとしても、なかなかうまくいかないということは経験的に知っています。他人と安心して関わりができるよう、あるいは他人との関わりが楽しいと思えるよう、できるだけ自分の力が発揮できて、本人自身が必要とする場面に、本人主導で手助けを求められる。そういった取り組みを通して、「強度行動障害」と言われる人たちの支援に携わってきました。

今回のケースでは、一定の様式に沿って、継続的に記録を取ってきました。それをまた整理・分析して、その行動の持つ機能と起こる背景、本人の行動特性や環境状況など、そういったものを明らかにしたことで、特性に応じて個別支援を実施してきたことが、一定の成果をあげることができた要因ではないかと考えています。